

Title	2) 「研究開発コロキウム」報告〔要約版〕：〔大学院GP〕採択：風景構成法における彩色についての研究
Author(s)	松井, 華子; 皆藤, 章; 千秋, 佳世; 山本, 有恵; 古川, 裕之
Citation	研究開発コロキウム：平成20年度 成果報告書 (Colloquium for Educational Research and Development) (2009): 46-47
Issue Date	2009-03-31
URL	http://hdl.handle.net/2433/143118
Right	
Type	Article
Textversion	publisher

風景構成法における彩色についての研究

A Study on Coloring Process in Landscape Montage Technique

研究代表者 松井 華子 (D3) 教員 皆藤 章
研究分担者 千秋 佳世 (D3) 山本 有恵 (D3) 古川 裕之 (D1)

〔研究目的〕

風景構成法は、中井（1970）により創始された技法である。風景構成法は、サインペンを用いて10のアイテムと足りないと思うものを描く構成過程（素描）と、クレヨンなどを用いて自由に色を付けてもらう彩色過程とからなる。風景構成法に関する先行研究として中井（1971）、高江洲ら（1976、1984、1996）、高石（1988、1996）などがあるが、これらはいずれも構成過程に重きが置かれた研究である。

彩色過程に関する先行研究として中井（1996）、松井（1996）などがあるが、これらは構成過程との関連から、または、疾病特性の観点から彩色過程について述べられているという点で、彩色過程のもつ独立した意味を十分に検討したものとは言い難い。

以上から、本研究は、風景構成法において彩色がなされることで描き手・見守り手双方にもたらされる意味を探ることを目的とした。

〔研究経過〕

教育学研究科で所有する描画データベースに収められた臨床素材 229 枚のうち、風景構成法作品 164 枚を一枚ずつ見ていき、気づいたことを挙げていった。そこで気になる点を有する作品 12 枚について、それを描くことを追体験するために模写を行った。その後、あらためてデータベース内の作品を見ていき、特に彩色について見られる特徴を挙げていった。そこで挙げられた特徴について、作品を見る指標として耐えうるものとするためにディスカッションを行った。そこでは、得られた特徴の相互の関係を見ながらその定義を精密にしていった。その際、作品に照らし合わせる作業を耐えず行い、議論が臨床素材から乖離してしまうことがないように留意した。

また上記の活動の他に、臨床と研究における描画の意味について見識を深めるため、外部講師を招聘し、2回のシンポジウムを開催した。2008年12月13日には、坂田浩之

先生（大阪樟蔭女子大学）、鶴田英也先生（梅花女子大学）をお招きし、描画について両先生が考えておられることをお聞きし、さらに事例検討も行った。2009年1月10日には、奥田亮先生（大阪樟蔭女子大学）、山川裕樹先生（成安造形大学）をお招きし、描画データベースを用いた研究についてお話しいただいた。

〔研究成果〕

データベースの検討から抽出した指標として、「塗り残しあり」（素描時に描かれたアイテムで、塗っていないものがある）、「余白を塗っている／塗っていない」（アイテム間に残る余白を塗っているかどうか）、「縁取り」（アイテムの素描線に沿って、縁取りをした後にその中身を塗る）、「彩色のみでの表現」（素描時にペンで描いたもの以外の形態のあるものを彩色道具のみによって描く）、「重色」（複数の色を同一の箇所を重ねている）などがある。

これらの指標を検討した結果、「彩色のみでの表現」で地平線を描く場合など、これまで言われてきたとおり彩色が構成を助けるようなものも見られた。しかし、「重色」のように、必ずしも構成には寄与しないものも見られた。このことから、細やかなニュアンスの違いを表現するような、彩色過程が独自に持つ意味があると考えられる。

今後は、「重色」指標についてさらに検討するとともに、その他の指標の定義や指標間の関連を見ていくことで、彩色過程の意味をより深く考察していくことが課題として挙げられる。

また、指標の検討においては、シンポジウムでうかがったことから示唆を得たところも大きく、そこで得られたことは、今後研究を続ける上で生かされていくものだと感じられた。